

称号及び氏名	博士（人間科学）	井上 靖子
学位授与の日付	2019年3月31日	
論文名	「母なるもの」と心理療法	
論文審査委員	主査	川原 稔久
	副査	総田 純次
	副査	橋本 朋広
	副査	前川 美行 (東洋英和女学院大学大学院教授)

論文要旨

本論考では、Jung, C. G が心の深層に見出した太母元型 (The Great Mother, Die große Mutter, Jung, C. G., 1954/1982, p. 127, Neumann, E., 1955/1982, 以下、「母なるもの」と略記) を取りあげ、心理療法における「母なるもの」のイメージの治療的意義について考察を深めることを目的としている。ここで Jung, C. G. (1954/1982) が指摘した「元型」(Archetype) とは、「先験的に与えられている表象型式の可能性」(p. 127) であり、人類普遍の集合的無意識を構成する概念である (p. 10)。「元型それ自体」は、表象不能であるが、元型的イメージとして把握される (Jung, C. G., 1938a/1989, p. 130)。本研究では、イメージの内容だけではなく、その働きに着目し、その治癒力を明らかにする。そして、「母なるもの」のイメージを生かした心理療法を「二度生まれのセラピー」と命名し、クライアントの心身の変容を促進するのが、「母なるもの」の両義性のイメージであることを、事例研究を通して明らかにする。本論考は**三部七章**から構成されている。

第 I 部序章第 1 節では、本研究で取りあげる問題意識と目的を論じた。「母なるもの」のイメージには、Jung, C. G. (1954/1982) が指摘した「守り育む愛、熱狂的情動、冥府的暗黒」(p. 130) の多義性の三側面、Neumann, E. (1955/1982) が指摘した「基本的性格 (容器性)」と「変容的性格 (流動性)」(p. 41) の機能的な二側面があり、各々肯定面と否定面を有している。また、その中心的象徴は、「容器」(Vessel, Das Gefäß, Neumann, E, 1955/1982) であり、人間が身体や世界を把握する時、我々を取り囲む容器イメージとして体験される。Giegerich, W. (1985/2000) は、近代以前の世界観では生活空間を循環するウロボロスイメージが取り囲んでいたと指摘する (p. 51)。ところが、Descartes, R. (1637/2001) の二元論的思考の台頭で、「母なるもの」も肯定面の「慈母像」と否定面の「恐母像」に乖離して認識されるようになった。これを『母なるもの』の傷つきと呼ぶ (井上, 2013)。筆者の臨床経験でも、「母なるもの」の否定面の影響によって、存在の根底が揺さぶられている事例が

多く散見された。そこで、心理療法における「母なるもの」の両義性のイメージに着目して論考を深める。**序章第2節**では、本論考の全体的構成を明らかにした。

第1章第1節では、心理臨床における母性、母親的役割、「母なるもの」のイメージについての先行研究の全体像を概観したうえで、「母子一体性（根源的一体性）」に言及した臨床家の実践研究として、1、Schwing, G. (1940/1966)、2、Winnicott, D. W. (1965/1977)、3、Little, M. I. (1981/1998)、4、Balint, M. (1968/1978)、5、吉野千鶴子(1980)、6、Kalff, D. M. (1966/1972)らの治療論の内容をまとめた。いずれの治療論も、生成と破滅、分離と融合、一体性を受けとめる容器の意義について指摘しているものの、母親的人物やセラピストの治療態度に関する説明であった。**第2節の1**で、Jung, C. G. (1963/1973)が元型的イメージの侵襲を受け、イメージとの対話や対決を行なったが、その取り組みが「母なるもの」というイメージを意識化していく過程だったことを論じた。また**2**で、Jung, C. G. (1954/1982)の「母なるもの」のイメージの内容や働きの特徴をまとめた。**第3節**で、Neumann, E. (1955/1982)の「母なるもの」のイメージの構造化された全体像とその特徴を記述した。これらをふまえ、**第4節**では本研究の論点の位置づけと独自性を記述した。臨床家の実践研究では、母性的配慮としての治療論が中心であった。また、Jung, C. G. (1954/1982)やNeumann, E. (1955/1982)は、「母なるもの」の元型的イメージの特徴や構造を詳述したが、心理療法的意義が明らかになったとはいえない。そこで、心理療法におけるクライアントのイメージ表現や、セラピストがクライアントとの関係で体験する事象に「母なるもの」の両義性のイメージを見出す意義について、事例研究を通して考察することを本研究の独自性とした。

第2章では、事例研究を方法として用いた意義を検討した。「母なるもの」を探究するのに、「心的現実の間主観性」を対象とする、河合(1976b, 2001a)の論考が有効であることを論じた。**第1節**では、心理臨床研究において、一事例を深く探究する方法が軽視されている問題点を明らかにした。**第2節**では、下山(2001)の事例研究論を取りあげ、河合(1976b, 2001a)の事例研究論との共通点や相違点を論じた。個の探求を通して普遍的知見を得ようとする点で共通するが、下山(2001)は、認知を扱い、質的研究法によってモデルの一般化を行なう。一方、河合(1976b, 2001a)は、他者との関係性で体験される、無意識を含めた「心的現実の間主観性」を扱い、現象学的方法で「視野の拡大」(河合, 1967, p. 7)を目指すという点で異なっている。**第3節**では、クライアントの「心的現実」には、外的現実に戻元できない、固有のリアリティがあることを解説した。**第4節**では、クライアントは治療関係に支えられて、「心的現実」を表現できることや「心的現実」に新たな視野が見いだされ、治療可能性が生じるという点で、「心的現実の間主観性」の意義を論じた。**第5節**では、臨床実践の両義性という観点から、河合(1976b, 2001a)と下山(2001)の両者の視点を生かし、クライアントの心的現実を尊重していくことの重要性を明らかにした。

第II部では、筆者が実践した四事例を取りあげ、「母なるもの」のイメージの治療的意義を検討した。なお、事例研究の倫理的配慮に関して、学術誌掲載時に審査を受けている。**第3章**では、虐待を受けた**児童期男児**の心理療法(**事例A**)を通して、破壊衝動の表出が、「母なるもの」の両義性のイメージで受けとめられ、悪の自覚を可能にした過程を論じた。**第4章**では教室入室困難に陥った**前思春期女児**の心理的成長において(**事例B**)、犠牲と再

生を可能にする「母なるもの」の両義性のイメージと水イメージが、女兒の身体像や世界観の変容をもたらした過程を論じた。第5章では、親子関係の愛憎葛藤を抱えた思春期女兒の心理療法（事例C）を取りあげ、孤立感の投影を引き受ける両義性の母神イメージが容器イメージとなり、心理的危機を乗り越える過程を論じた。第6章では、母性的配慮の乏しい家族で育った青年期女性が、夢と描画表現を通して、天空と大地に乖離したイメージを結合させて、「母なるもの」の超越的イメージに癒された過程（事例D）を考察した。

以上をふまえ、第Ⅲ部第7章で、総合的考察を行った。第1節では、四事例のクライエントの心の傷つきの特徴を、「母なるもの」のイメージの観点から考察した。第2節では、四事例の考察を振り返り、心の変容や治癒を導いた契機の特徴をまとめた。すると、多様な性質をもった容器イメージと質的に変容する水イメージの表現があり、特に、クライエントの心の変容の転機に「母なるもの」の両義性のイメージの働きが見られた。第3節では、四事例の心の変容を導いた治癒の契機について、各事例間の差異性（表現方法、攻撃衝動の表出、容器イメージ）を考察した。表現方法は事例AとBは、身体や行為、事例CとDは表象や象徴として表出する特徴が見られた。また、攻撃衝動の表出は、事例Aは原始的、事例Bは口愛期的、事例Cはエディプス期的、事例Dは自傷的という違いが見られた。容器イメージでは、事例Aは肉体的一体性、事例Bは壁による保護機能、事例Cでは、背景（地）で支える保護機能、事例Dでは、出立を支える容器機能の特徴がみられた。さらに、四事例の共通要素を抽出すると、クライエントの主訴を契機に、様々な容器イメージに支えられることで、恐母像と慈母像を結合させて、心の成長や治癒に至る過程が見いだせた。そこで、第4節では、四事例の共通要素を「二度生まれ」のモチーフと捉え、宗教者の変革体験、太陽神や大地母神神話との関連を考察すると、「母なるもの」の両義性のイメージが重要だとわかった。第5節では、四事例の心理療法を、「二度生まれのセラピー」と捉えた。「二度生まれのセラピー」とは、多様な容器イメージに保護され、破壊や死のプロセスを生き、「母なるもの」の両義性のイメージの根源的で自律的な働きに出会って、新しい自己像を産出し、心身共に癒される心理療法と定義した。元型的イメージの自律的な働きが関与することで、クライエントやセラピストの意図を越えて、「第三のもの」

（Giegerich, W., 1978/2000, p. 4）のイメージが体験され、心身の変容に至る意義を明らかにした。第6節では、こうした心理療法の課題として、自我インフレーション、心的感染、固定的な物語と捉えないこと、身体技法の鍛練の必要性を取りあげた。現代社会は、自然の管理や支配が優先され、我々の心の深層から生じる心身の経験が軽視される弊害が問題となっている。そこで、心理療法において「母なるもの」のイメージを生かすことが、心の全体性の均衡を取り戻し、生命や身体性の両義性を回復していく目的論的意義を有することを論じた。（字数：3465）。

初出一覧

第Ⅰ部「母なるもの」に関する理論的検討

- 序章 書き下ろし
- 第1章「母なるもの」のイメージについての先行研究 書き下ろし

第2章 本研究の方法論

奥田恭士・寺西雅之・糟屋美千子・内田勇人・保坂裕子・井上靖子(2018)基盤研究(C)
「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用」
科研報告書 掲載予定

第Ⅱ部「母なるもの」からみた事例の実践的検討

第3章 虐待を受けた子どもの心理療法

井上靖子(2014)「虐待を受けた子どもの遊戯療法～「母なるものの元型」のイメージ化
とその両義性の結合の観点から～」兵庫県立大学環境人間学部 研究報告書第16号
pp. 11-21. (査読有)

第4章 「いのちの水で綺麗になる」と述べた前思春期女兒の心理的成長

井上靖子(2013)「『いのちの水で綺麗になる』と述べた前思春期女兒の心理的成長」箱
庭療法学研究 Vol.26. No.1. pp.31-41. (査読有)

第5章 「私は六条御息所だ」と述べた思春期女兒の心理療法

井上靖子(2010)「『私は六条御息所だ』と述べた思春期女兒の心理療法過程―描画・物
語表現にみる初潮のイニシエーション―」箱庭療法学研究 Vol.23. No.2. pp.53-66. (査
読有)

第6章 夢と描画表現にみる「母なるもの」の傷つきと癒し

井上靖子(2013)「夢と描画表現にみる『母性』の傷つきと癒し」ユング心理学研究 第
5巻「心の古層と身体」pp.117-138. (査読有)

第Ⅲ部 総合考察

第7章 「母なるもの」と心理療法

書き下ろし

以上

学位論文審査結果の要旨

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文の研究テーマは、心理療法における「母なるもの」の働きであり、絞り込まれている。本論文の目的は、ユングが提起した元型の一つである「母なるもの」の心理療法における働きを事例研究によって示すことである。

2) 論文の方法論が明確である。

本論文の研究方法は心理療法の事例についての事例研究方法であり、明確である。事例研究論を比較検討したうえで、間主観的な現実を対象とする事例研究方法が、本論文の研究方法として適切であることを明示している。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

心の問題とも関連する母親に関する研究や母性機能に関する研究を広く検討吟味したうえで、ユングによる「母なるもの」の考え方に近い治療論を展開したシュビン、ウィニコット、リトル、バリント、吉野千鶴子、カルフの先行研究を吟味し、ユングとノイマンにおける「母なるもの」の元型という概念の先行研究を十分に検討している。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論文の研究の素材は四つの事例（児童期・前思春期・思春期・青年期）であり、事例研究によって十分に検討している。児童期の事例として虐待を経験した子どもの集団遊戯療法の過程を、前思春期の事例として入室困難や排尿困難を訴えた子どもとのスクールカウンセリング過程を、思春期の事例として幻覚体験や自傷行為を呈した子どもとのスクールカウンセリング過程を、青年期の事例として自殺未遂に至った女性との心理療法過程を吟味している。なお、いずれの事例研究も既に査読付き学術誌に掲載済みであり、その倫理的な配慮に関しては掲載時に審査済みであることを、本学位論文審査委員会は確認している。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

本論文の新しい知見は、心理療法における「母なるもの」の働きを事例研究によって

実証したことである。「母なるもの」の働きは、セラピストの操作的意図を越えて、クライアントとセラピストの二者関係を包括する治療的な環境の全体を、破壊的な情動を包み込む容器として組織化し、クライアントに自分を包み込む容器のイメージを体験させるということを事例によって実証している。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

「母なるもの」が四つの事例で果たした働きと治療要因を吟味し、事例による違いと共通性から、必要にして十分な議論と実証がなされている。とりわけ、各事例の心の問題を整理し、治療の展開となり「母なるもの」の発動と考えられる事象を丁寧に吟味したうえで、治療構造、治療関係、クライアントの病態水準と表現の様態、「母なるもの」のイメージの表れ方を比較検討し、各事例において容器イメージが共通していることを議論したうえで、その展開過程を実証している。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

心理療法に関するこれまでの研究では、心の問題と解決を、個人の母性の欠如と充足といった枠組みで思考する傾向があったのに対して、本研究は個人を超えた次元における「母なるもの」の働きを実証したことが独創的である。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は、本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。